



青春出版社

青春出版社

三浦哲郎

ひとりを愛するなら

— 絶対からの出発

著者紹介

昭和6年青森県生まれ。作家。
早大中退，中学校の助教諭生活の
のち，28年早大文学部に再入学。
同人雑誌「非情」創刊。30年「15
歳の周囲」で第2回新潮同人雑誌
賞を受賞。31年1月結婚。32年3
月早大卒業。貧窮と戦いながら創
作に励む。35年PR雑誌編集の傍，
小説「忍ぶ川」を発表。同年第44
回芥川賞受賞。以後作家生活に入
る。
主な著書に「忍ぶ川」「初夜」「風
の旅」「結婚」「海の道」「繭子ひと
り」等がある。

検印を廃す

ひとりを愛するなら——絶対からの出発

昭和四十六年十一月十五日 第一刷

著者 三浦 哲郎
発行者 小沢 和一

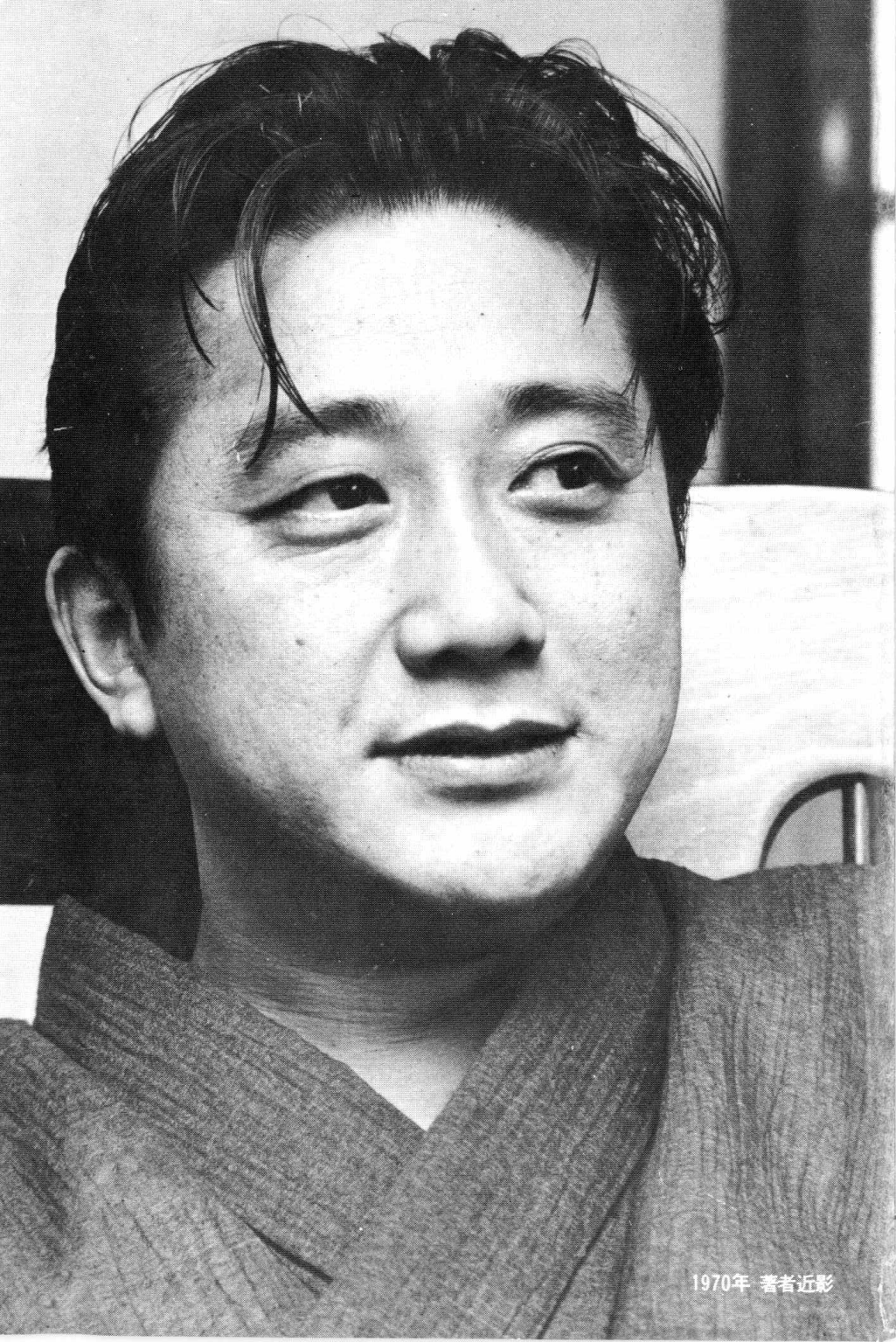
発行所 株式会社 青春出版社

東京都新宿区若松町73番地
振替番号東京九八〇二番
TEL (203) 五一三一〇五

★この本をお読みになったご意見ご感想を編
集部までお寄せ頂ければ幸いです。

印刷・製本 (株)中央精版

0000-204800-3822



1970年 著者近影

い　よ目の下の眼をしまし、うに瘰癧のせゐる。ふく
のひや、そをも見極めずには、輕々しく吐いた。
ちきりの言はれど、さしいものではないわう)。と
の言葉のうちに、二人は愛情もたなく愛のお墨子

二　いづりであらう。

奇まうと互いに友の記しをたうまうとす
 ば、そゝには互いの肉、しかなない。肉、むけ
 の友の愛しむこへけき、着くか――。

交りたると言葉が、
 漫々たる夏ののしむり
 のしむりなみのり
 のしむりなみのり

云雨 部



36年春 芥川賞受賞直後、多摩川にて 撮影 林忠彦

目次

I 一人のひとを愛するために

13

愛は失い方を知っておくこと 15

はやくその男の中から

心に古傷をもつ人

愛はいのちをも奪うか

その哀しさに耐える

自分で自分を無にしようとするとき

誰に喜びを与え得るか 24

誰が買って来たか解らない日記

不可解な姉の死

自分が、なぜ死なねばならぬのか

I子が受けた大きな衝撃

溺れた愛は虚しい

愛にある心のいつわり 35

男におそった突然の恐怖

焚火に賭けた二つの魂

二人の中の愛の決意

愛は生きるために

きわめて現実的な愛の姿 45

自分の家でやる結婚式

田舎でやる縁固めの盃

この世でめぐり合った二人なら

この人こそ、と思ひ込む過ち

Ⅱ 自分を燃焼し尽して悔いないか

どんな言葉にも頼^{たよ}つてはならない 57

ひと言も語り合わない言葉

何も役に立たなかった愛の知識

自分の胸を波立たせるもの

女が期待する言葉

一度は経験する眩^{まよ}しい愛 67

誰でも大人になるまえに

自分だけが好きになっても

自分だけが、なぜ苦しむか

目が潤^{うる}む一瞬の思ひ出

悩みを人に打ち明けたとき 77

未知の人から舞い込む手紙

山積みになる悩み事相談

自分自身で解決する意識

自分の種子にするために

平凡でも積み重ねていく愛 86

送られてきた百数十通もの恋文

お婆さんが考えた決心

二人だけにある大きな価値

たとえ平凡に見えても

互いに求め合う意識 95

呪われた誕生日

百円で売った処女

「あげて、よかった」と「奪われた処女」

性衝動をそそる流行語

愛の頂点で求め合う軀

固く閉ざした心も綻びる女の弱点 105

ほころ

Ⅲ 絶えず肉体と密着した女の宿命

面食いは一つの憧れである
カッコよさに乗せられ易い女性
不幸な美男好みの女性
男性が結婚に必要な女性

青春を生きる娘の一つの知恵 117

娘にかけてくる男の電話
はらはらしながら見守る父
自分一人で悩みに悩むこと

母になった女の知恵 126

子供を生んだ女の美しさ
乳をふくませる妻の姿
子に賭ける母の悲しみと幸せ

若さをたよりに生きるとき 134

信じてもらえない過去の自分
女にとっての若さの代償
女性の多くは年齢を偽る

忘れてもらいたくない女の季節

女として生きる女の美しさ 144

最も美しい人間

女が生身の肉体を抱えて揺れ歩くとき

十八歳の乳房をもったお婆さん

生涯女であり通す仕合わせ

Ⅳ この女を自分の妻にできたら

いま失えば、二度と会えない人 157

その店の女たちのうちの一人に

あの「忍ぶ川」にいるお高い女

どぎまぎさせた水商売の女

世にも素朴な女の姿

この女と一緒に生きたら

自分の夫として相応しいひとか 169

突然、結婚式を告げてきた娘

娘が決めた相手の男性

女性が結婚の相手を選ぶとき

その人でなくても相応しい男性
惚れたら、潮時である

女の原型から生まれた認識 180

私の出発点

哀しみの種を励みに顔を上げる女
苦勞を引きずって可愛く生きる女

V 忘れてはならない宿命

悪夢の記 — わが生い立ち — 191

ふと立ち止って振り返るとき

この道と、もう一つの道

知らされた衝撃の出生

つぎつぎに迫る蹉跌

ほぐれ落ちていくきょうだいの輪

身近に感じだした死

軀の中に流れる血の誘惑

血を雪ぐべきただ一つの方法

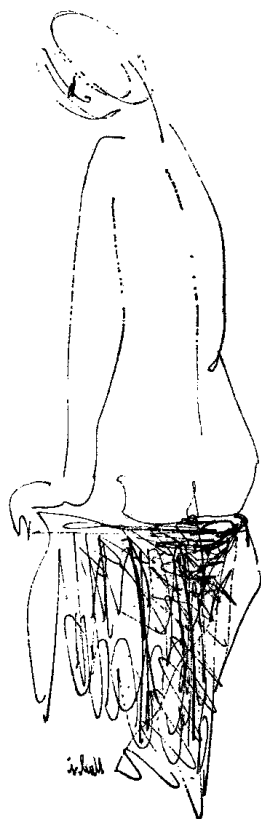
自分の中に何を賭け続けるか 211

ひそかに二つを賭けた青春
私の中の一つの道標
危ぶまれながら出発した結婚
この賭けを二人が続けていくかぎり
あとがき

220

章扉カット
斎藤満智子

I
一人のひとを愛するために



男女のことは、当人同志でなければ本当のところはわからない。はたの目から、あんな仲と呆れられても、当人同志がそれでよければ文句のいいようがないのだ。そのかわり破れたときは自業自得だと突っぱねて、けれども内心はらはらしながら黙ってみているよりほかないのだ。そういう彼と菊枝の仲にしても——ゆくゆくはどんな拍子にどんなことになるかわからない。

「結婚」より